
猫かぶりの日常

藍川 結衣那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫かぶりの日常

【Nコード】

N3872U

【作者名】

藍川 結衣那

【あらすじ】

これは、セントポーリア王国の公爵家の娘の話。あるときは貴族の令嬢として、社交界やお茶会に、あるときは王子・王女の家庭教師として教える身。そんな彼女の正体は16歳になった今でもおてんばで悪戯好きの少女。そして、さらなる秘密もあって・・・それを知るのは、両親と幼馴染で城の騎士である二人だけ。そんな彼女たちを巻き込んで、これからちよつと普通じゃない日常が始まる！（はず？）

プロローグ

はるかなる古の時よりこの国は、神族と呼ばれる者たちによって治められていた。

神族は、自由自在に火を操り、あらゆるところでそれを活用し、人々を助けた。

しかし、神族と呼ばれ、特別な力を持つとともに、所詮『人』であった。

時がたつにつれ、神族はその力を権力としてふりかざし、人々を支配した。

火を操り、赤い髪をもつ神族は、人々から恐れられた。

やがて、神族だけが裕福となり、民は貧相な暮らしをするようになった。

だが、民とて人であった。

ついに不満をつのらせた人々は、反乱を起こした。

長い戦乱が続いた。

多くの命が失われた。

神族の血も民の血も、どちらも流れた。

そして、長い戦いは終戦をむかえた。

神族は捕らえられ滅びた。

もともと、数の少なかったことに加え、長い時を経て、その血は薄まっていた。

何より、人々の憎しみに勝つことができなかった。

それから人々は新しい王をあげ、国をつくった。

戦いで活躍したものには、貴族として領土を与え、そこを治めるようにいった。

人々は自由に遊び、働き、食べ、かぎりある命を大切に生きた。

これは、その後の話。

あれから100年、セントポーリア王国となったこの国は、みんなが幸せに生きていた。

そんななか、運命の齒車は少しずつ確かに動いていた。

セントポーリア王国で新たな波乱の予感！

ブログ（後書き）

読んでいただいて本当にありがとうございます。

はじめて投稿するので、文章などつたない部分がたくさんありますが気にしないでください。

ちょっと書いてみたかったので。

コメントとかもらえたらうれしいです。

この話はもうしばらく続きます。

1日のはじまり

「メアリ様、おはようございます。朝ですよ。」

「うーん、おはよう。」

「今日は、お嬢様のお好きなフレンチトーストですよ。」

「そう、うれしい。着替えたらすぐに行くわ。」

そんな会話がされ、いつもと同じ朝をむかえた。

まだ少し寝ぼけたままのメアリは、窓からさしこむ光に目をほめる。

これが、メアリの一日のはじまりだった。

メアリはセントポーリア王国の三大名家とも呼ばれる、グランテ
ーヌ家の長女だ。

公爵の称号をもち、王に仕える父とその妻である母、そして3歳
下の弟の4人家族だ。

しかし、他の名家に比べ、使用人の数は格段に少なかった。

自分のことは自分ですると小さいころから育てられたメアリには、
侍女は一人しかいなかった。

両親や弟においてもそれは、同様だった。

そんな屋敷であっても、屋敷内には、活気があふれていた。

父や母は、使用人たちにも気をつかって、些細な会話を楽しんだ
りしたし、なるべく自由にした。

それが自然なグランテーヌ家では、使用人どうし、また主人たち
ともに仲が良かった。

そんなわけで、おちついた調度品の並ぶこの屋敷は、朝からにぎ
やかであった。

メアリは眠たい目をこすりベットから出ると、洗面台へ向かった。
そこで顔を洗うと、リオが用意してくれていたタオルで顔をふく。

やっと、少し目が覚めると、先ほどリオが言っていた事を思い出して、自然と顔がほころぶ。

着替えをすまし、髪にくしをとおしてから食堂へ向かう。

3日に一度は、家族全員でとることにしているが今日はその日ではない。

起床した時間が同じくらいであれば、いっしょになることもあるが。

今日はどうやら一人らしい。

もうみんな朝食はすませたのだろうか。

席について「いただきます」と手をあわせて好物のフレンチトーストから手をつけ、ひと段落すると、

横に立っているリオに今日の予定を聞く。

数回、いっしょに食べようとさそったことがあったがきっぱり断られたので今はあきらめている。

「ええと、今日は城のローズガーデンのお茶会に誘われていますが。」

「ねえ、それってお断りするかとはいできないのかしら？」

「うーん、難しいかと思いますが。」

「そっか、また何か口実をみつけて・・・」

メアリは最後まで言い切ることができなかった。

新たに食堂に入ってきた人物がさえぎったのだ。

「ダメですよ、姉さん。またそんなことを言ってさぼったら。」

「あら、おはようケイ。今日はいつもよりおそいのね。」

弟の忠告をあっさり聞き流して、何事もなかったかのようにあいさつするメアリ。

ケイの侍女がゆっくりと扉をしめる。

ケイはテーブルへと足を進めた。

ケイは、メアリの弟であり、一応グランテーヌ家の次期当主である。

ケイは基本的に真面目な性格で、手を抜くことを許さない。
まあ、そんなこともありメアリは、そんな堅物だとモテないわよとよく言うのだが。

これも普段と変わらない姉弟の会話だった。

そんな会話を傍でみている侍女の二人は、今日もまた少し遠慮がちに微笑んでいる。

言い合いが落ち着いたところでまた、リオが声をかける。

「今日はお茶会の他に城のものが寮を案内してくれるそうです。」

┐

「ええ、いくと伝えてほしいわ。」

そういえば明日からそうなのだった。

すっかり忘れていたメアリだった。

‘寮’と聞いてなぜ？と思う方も多いと思うので説明しないとな。
わたしは明日から、王城で王子様と王女様の教師として学問を教えることになった。

なんでも人がいないのだとか。

基本、身分の高い家のものがそんなことをするのは、ほとんどない。

でも、お茶会やら舞踏会やらで時間をつぶし生活するのがイヤでしかたなかったわたしは、父様にこの話を聞いたとたんとびついた。
まあ、くわしいことはそのうち。

それで、どうして‘寮’になるのかというと、城内ではたらくものには一部屋ずつ部屋が与えられるから。

階級などによって、部屋の広さは変わるけれど。

わたしは、身分の高い家だからといって、続き部屋を用意してもらっていたけれど、わざわざ侍女たちと同じ部屋に変えてもらった。

そんな大きな部屋、わたしに必要なじゃないもの。
それにいつでも実家に帰ることができるんだから。

「王女様、王子様への正式なあいさつは明日だそうです。
明日から、もう教師として教えてほしいのだそうです。」

よつぽど、人がいないのだろうか？ 明日からだなんて。
まあ、いいけど。

あるていどの知識はもっているつもりだし。

貴族の子は、小さいころから学問や乗馬、音楽などをたしなんでいるため、あるていどの教養はみにつけている。

しかし、そんな中でもメモリの学問の知識は相当なものだったのだが、本人はまったく気付かないようだった。

「姉さん。僕も今日、王宮へ行くのですが一緒にいきますか？」
そういえば、ケイも王宮へいくのだったと思ったが、

「いいわ、わたしちよつと寄らないといけないところがあるの。先
に行っていて。」

用事があつたのでことわる。

ケイは、何となく予想がついてしまったのだが、それ以上は何も
言わないケイをみて、わたしはにっこりわらった。

「どえせまた、何かやらかすんだろ・・・。」

目の前でケイがそんなことを呟いたことには、まったく気づかず
に。

1日のはじまり（後書き）

すごかつたない文ですね。

ホント読んでくれて感謝です。

お茶会で・・・

「ごきげんよう。おそくなってしまつて申し訳ございません。

カリン様、セイラ様、ユラ様、お変わりなくてうれしいですわ。

」

「ごきげんよう、メアリ様。

おくれてなどございません。どうぞ、お気になさらずに。」

「そちらこそ、お変わりなく。お会いできてうれしいわ。」

「そうですね。それにまだミモザ様はいらしてませんの。」

「まあ、そんなんですの。」

朝起床してから約2時間ばかりたつたところ。

城に来て、わたしはお茶会の行われるローズガーデンへと足を向けた。

進んできたわけじゃないんだからね。

しかたないからよ。ホントは来たくないし。

少しゆつくりきたけど、ミモザ様がまだ来ていない時間にくるのは計算済み。

ミモザ様は陛下の姪にあたる御方。

さすがにその方より後から来るのは失礼でしょ？

すると、向こうの小道に人影が見えてきた。

今日は人が多いみたい。

多分ミモザ様と一緒に来るのは、王女であるローズ様。侍女だけでなく騎士たちもいるし。

「こんにちは、皆様。

今日は、お姉様も一緒なのよ。」

そう言うと、ミモザ様は可愛らしく笑った。

とてもうれしくて、自慢したいというような表情だ。

「ごきげんよう。」

わたくし
私も一緒にしてよろしかったでしょうか。」

ミモザ様に続いてローズ様もわたしたちにあいさつをする。

ミモザ様に比べれば大人びた言葉づかいだが、まだ幼さが残っていた。

ミモザ様、ローズ様はともに王家の方で王宮で暮らしている。

ローズ様とミモザ様は、年が近く（ミモザ様13歳、ローズ様14歳）従姉妹どうしだということからとても仲がいい。

もちろん、王子であるキース様（16歳）とも仲がいいのだが。

ミモザ様とローズ様が席について二人を中心に城のなかでの些細な出来事の話に花を咲かす。

わたしは一応話しに加わりながら、横目でローズ様のうしろを見る。というか睨む。

なんでヒロトがここにいるのよ。

アルトがいるならわかるけど。

ヒロト（16歳）とアルト（18歳）はわたしの幼馴染であり城の騎士。

ふだんヒロトは王子の護衛、アルトは王女の護衛を他の騎士と一口テーシヨンして行っている。

護衛じゃないときは、訓練か町の見まわり。

あと、ヒロトは三大名家の二つめ、ウィンダニア家の次男。そんなわけだから、アルトはヒロトのお目付け役でもある。

そういえば、このお茶会に参加しているセイラ様が三つめの三大名家、イロツト家の長女。

わたしは、この人あんまり好きじゃないけど。

まあ、それはそれとして。

なんでヒロトがここにいるの、ホントに。
やりづらいんだけど。

ヒロトはわたしが猫かぶってることしってるんだし。

絶対内心、笑ってるでしょ。

うう、笑顔がひきつってないか心配。

お願い、早く終わって。

「そういえばあたし、今日は叔母様に呼ばれていますの。
もういかなくても。みなさんともっとお話ししたいのです
が。」

「おお、ミモザ様。今は天使に思える。
早く、お開きにしましょ。」

「そうでしたの？」

「まだご一緒したかったですわ。」

「ああ、余計なこと言わなくていいから、セイラ。」

「ホントですわ。」

でも今日はこれで失礼します。お姉様はどうしますか。」

「お願い、ローズ様。お開きにするって言って。」

「ええ、そうね。」

私も用があるの。これでお開きにしましう。」

「やった」。これで自由だ。今日はすることがいっぱいあるんだ
から。

多分わたしは今、作り笑いではなく、本当の笑みを浮かべている
だろう。

まあ、その違いはここにいる人にはわからないだろうけど。
ヒロト以外には。

「あの、メアリ様と私^{わたくし}お話したいことがあるのですが。
もう少し時間はあるのでしょうか？」

「あの、ローズ様？　今、何ておっしゃいました？
ありえないでしょ！　どうしてこんなことになるの。
」もちろんです。ローズ様。

時間はかまいませんわ。どうぞお気になさらずに。」
ちゃんと笑顔が作れていただろうか。

絶対引きつってるわね。

少し、というかなんかキレてるけど、まさか王女様相手におこる
わけにもいかないし。

それにまだみんながいる。

ここでそんなことをしでかしたら、家にも影響を及ぼしかねない。

さらに、ミモザ様以外のメンバーの視線がすごい。

何であなただけ、という思いが全然隠れてない。

だいたいわたしも早く帰りたいんだから。

そしてそんなわたしをみて、笑いをこらえているヒロト。

わたしが睨むと、‘バカ’と口を動かす。

あゝあ、どうしてこうなるのよ！

お茶会で・・・（後書き）

何か全然、話が進んでいないような気がします。
説明長いですね。

これからなんとかがんばりたいです。

休憩

「私^{わたくし}メアリ様とお話したいことがあるのですけど。」

少しずつ怒りがおさまって、冷静に考えるとその話は何のことだかすぐにわかった。

きつと明日から学問を教えるという件だろう。

お茶会の場には、皆がいたため話にくかったのだから。

この件はそれほど公けにはなっていない。

本人たちとその周りのごくわずかな者だけが知っているだけである。

「明日からお世話になるので、できれば挨拶をしておきたい。明日からよろしくね。メアリ様。」

ローズ様らしく、かわいい笑顔だった。

うん、やっぱり純粋な笑顔はかわいく見えるものね。

「いえ、こちらこそよろしくお願いします。」

わたしのことは、メアリと呼んで頂いてかまいませんわ。」

だって、王女様に‘様’なんてつけられると居心地悪いし。

「それじゃあ、お言葉に甘えて。」

それから、唐突ですけどなぜこの役目を引き受けたの？

グランテーヌ家の娘という地位をもっているでしょう？」

「……………はい？」

今のは無邪気な疑問？ それとも皮肉？

疑問なのだとしたら、ローズ様ってすごく天然？ それならちょっと怖いわね。

皮肉なら……………意外。

どちらにしろ、ローズ様のイメージがだいぶ変わることは確かだけど。

「少し日常が退屈ですの。

それに家への貢献になりますから。」

嘘じゃない、けど真実でもない。

ローズ様は少し驚いたようだった。

そう見えただけかもしれないけど。

それから少しお話してローズ様と別れた。

もちろんヒロトを睨むことも忘れなかった。

わたしがローズ様と話している間、笑いをこらえるような顔をしていたのだ。

あとから絶対、なんでここにいたか問い詰めてやるんだから。

とにかく、明日からの件は少し気が軽くなった。

まだ王子にはあいさつしていないけど。

まあそれはそれ。今はいいのよ。

今日は、いつものお茶会よりはましだったかな。

2時間後。

わたしは城内を一人でのんきに、でも怪しまれないように歩いていた。

そう、ひ・と・りでね。

リオはいない。(まいてきたの。)

そしてわたしは侍女のかっこうをしている。

(侍女の服がどこからでてきたかったのは、また別のときに。そのうちわかると思うけど。)

だから、誰もわたしを見て話かけてはこない。

あれから、寮の方にリオと行き、自分に与えられた部屋を確認してきた。

だいぶ前に荷物は送ってあったから部屋は大方片付いていた。
あとはちょっとした日用品などの小物だけだ。

城内だけでなく、庭園や噴水、森なども見て回った。

ふだんはお茶会や舞踏会のためにしかこのいからこついうところ
が見られないの。

いまは、リオもないから怒られないし。

あとから怒られることは十分ありえるけどね。

森のなかでなんだかカサカサと草が揺れたから、何かどうぶつが
いたのかも。

なんだろう？ うさぎ？ 鳥？ ただの風？

どれにしろ、会わなくてよかった。

動物は苦手、どうしても好きになれない。

そんなことをしていたら、空が赤金色へと染まってきた。

さすがにリオのどこまで戻らないと心配させてしまう。

でも、そのまえにあいつのところによっていこ。

多分そのうち帰るだろうから。

休憩（後書き）

なんか話が進んでいない．．．．．

次は目線を変えられます。

騎士様の気苦労（前書き）

ピロトver.です。

騎士様の気苦労

「はあゝ．．．」

「何？ ヒロト。溜め息なんてついて。」

俺の少し前を歩いているメアリがこっちを向いて聞く。

一応、人が少ない道を選んでいるがここは城内だ。

誰かに見られたら変は噂をたてられたら困る。

何？ おまえのせいだよ。よくもそんなことが言えるな。

だいたい、なんで俺はこんなことになってんだ。

そういつて自分に問いかけて、少し前の記憶を呼び戻す。

昼過ぎごろ、訓練が終わり、休憩をもらって寮に帰ってきた。

俺の仕事は王子つきの騎士だが、日頃、訓練をかかしてはいない。

そんなことで訓練で疲れた俺は、急いで部屋に帰ったのだが．．．

な・ぜ・か、こいつが部屋にいたのだ。

平然と人のベットに座り本を読んでいた。

それにくわえ、のんきに「おかえり。」などと言われたこっちは
たまったもんじゃない。

——まあ、時々あることなんだが。

それに馴染んでいる自分も怖い。

こいつとは家の関係もあって小さいころからアルトも加えてよく
会っていた。

幼馴染というのか腐れ縁というのか、微妙なかんじだな。

それは少し成長した今になっても変わらない。

茶会の後や舞踏会の前に時々、来ては何かと面倒なことを言い出

す。

アルトがいるときは、だいたいアルトに何か言われて諦めるが。

そして、ここは男子寮だ。

正面から堂々と入ることなんか絶対にできない。

ましてや貴族の令嬢なんかが。

こいつが入ってくるところを見たことはないが多分そこのしげみをぬって入ってくるんだろう。

城に仕える者が住まう場所に警備はほとんどないからな。

俺の部屋にしかこないのは、1階だからか。それともアルトだと小言を言われるからだろうか。

アルトの部屋は2階だが木をつたっていけば入れないわけではない。

聞かれることは何となくわかっていたが、こつちから言うこともないので黙っていた。

黙々と隊服を脱いでいるとメアリが口を開いた。

沈黙の時間が長いほど怒り度が高い。

長いときは、半時くらい沈黙が続いたこともあった。

さいわい今日はそこまで怒っていないらしい。

「どうして今日、王女様の護衛についてたの？」

ヒロト、王子つきの騎士のはずじゃない。」

口元は笑っているけど、目は完全に笑っていない。

よほど、今日の茶会がやりにくかったらし。

まあ、そんなのは俺のせいじゃないからな。

「ああ、そうだよ。」

でも、昨日数人の騎士が体調を崩したんだ。

それで今、食中毒じゃないかって調べてるとこ。

で、非番だった俺が入った。」

「ふん。でも、騎士なら他にもいるじゃない。」

「ああ、それは人手が今、少ないからな。

密輸のタレコミがあつて、そっちに人員つかつてゐるから。」

あまり部外者に言つてはいけないのだが、こいつなら大丈夫だろう。

何も言い返さないところを見ると納得はしたらしい。

こつちもこれ以上は部外者に言うわけにいかない。

俺は、唐突だが話を変えた。

「おまえ、明日から城に住むんだろ？」

こんなところにいていいのか？

どうせおまえの家、家族そろつて夕食とるんだろ？

「あゝ、そうだけど。もうすぐ帰るわよ！」

それじゃあ。明日はお菓子でも持つてきてつまもつかな。」

なぜか怒つて返された。

何気に明日も来るようなこと言つてゐるし。

——まあ、いいんだけど。どちらかといえはうれしい。

ここが男子寮でなければな……。

こんなところか。

で、俺は流れてこいつを送りにきたつてわけか。

俺が先ほどのことをしんみり？　と思ひ出している間にメアリはもう話を変えていた。

「そういえば、うちにバーベナがいたじゃない？」

バーベナ、明日から実家に帰るんだ。」

「バーベナつて、おまえの世話役の人か？」

なにかあつたのか？明日からつて。」

時々、メアリの家に行ったときにはだいたいたつたような気がする。メアリのおてんばぶりのせいで大変そうだった。

もつとも俺も一緒に遊んでいて、アルトとバーベナさん二人に怒

られたが。

それも、今となつては苦笑したくなる出来事だな。

メアリにはしょっちゅう木に登るな、もつとお嬢様らしくしろとか言つてたな。

それでも、よく小言をいうが、根は優しい人だった。

「わたしが、明日から城に住むからだつて。

少し前から娘さんの調子が悪かったみたい。

これを機会につて、父様と母様がバーベナの背中をおしたの。」

「そうか、残念だな。生まれたときから傍にいた人だしな。

でも、あれのことはいいのか？ 表にでたら、まずいことだら？」

「ああ、それは大丈夫。

ずっとグランテーヌの屋敷に仕えてくれた人だから信頼がおけるから。」

それにそのことはバーベナにもちゃんと云つてあるし。」

「それなら心配ないな。

バーベナさんがいなくなつたらさびしいか？」

後半は少しからかうような口調で問う。

「べ、別に。そりゃ、少しはさみしいけど・・・

でも、みんながいるから大丈夫。」

「みんな」のなかに俺も入ってんのかなと思ひながら、いつのまにか隣に並んでいたメアリを少し見下ろす。

そして、本来なら鮮やかな赤い髪、今は染め粉で染め、茶色になった髪を見つめる。

先ほどの「あれ」とはこの髪のことだった。

複雑な事情により赤い髪をもつて生まれてきたメアリはその髪を隠している。

まあ、この国でそんな髪色の人はいないのだからそのままにしていたら確実に目立つ。

そしてメアリがもっているのはその髪だけでなく、ある力をもっていた、

どちらかといえば、そちらの方が主だが。

そのことが世間にバレるわけにはいかないので簡単に屋敷から人を出すわけにはいかなかったのだ。

このことを知ってるのは、メアリの両親・弟、古くからいるグラントーナ家の屋敷の人、俺とアルト。

多分俺の父も知っているだろう。

「ヒロト、もうすぐ着くよ。」

しばらく俺が思考をめぐらせていると、メアリが声をかけてきた。俺もああと頷き少しメアリから離れかけた。

いろいろと面倒なことになっては困るのでいつもこうだった。

が、何かむこうがざわついていた。

この際何か口実を作ればいいと思い二人で、様々な馬車が並ぶ城の門先に歩を進めた。

そこには何やら人だかりができていた。

騎士様の気苦労（後書き）

微妙なところで終って・・・ますよね。

この続きを書くとすごく長くなりそうです。

この次はヒロトかメアリ、どっちの目線にしようかと考えています。
なので、どうなるかわかりません

不穏な影

ざわざわ、ざわ。

騒ぎの中心に近づいていくにつれ、周りの声が大きくなっていく。ヒロトは少し前から斜め後ろに下がっている。

騒ぎは数人が集まってできていた。

兵士や侍女、どこかの令嬢のような人もいる。どうしたんだろ？

「あの、何かあったのでしょうか？」
考えていても仕方ない。

いちばん近くにいた兵士に聞いてみる。

「い、いえ。俺、私もいま来たばかりで。」

でも、多分・・・「誰かに襲われた？」 あ、はい。多分そうだと思います。」

「またか・・・」

うしろでヒロトが呟く。

そして、しとろもどろにしゃべる兵士をさえぎったのはメアリのよく知る声だった。

「うわっ、アルト。」

そんな急に出てこないでよ。びつくりするじゃない。」

ボソツとつぶやくとアルトは素知らぬ顔をして続ける。

「お嬢様、何か言われましたか？」

「いえ、別に。それより誰かに襲われたというのは？
それにまた、とはどういうことでしょう？」

くそっ、アルト。

絶対聞こえてたんじゃない。

令嬢らしく、おとなしくしてろってことね。

いいわ、令嬢らしくちゃんとやるわよ！！

そう心の中で叫んでアルトをみると、アルトは“よくできました”というように頷いていた。

「最近、外部の何者かに城の者が襲われるということが多くあるので。」

「だいたい、少し高価そうな髪飾りや首飾りが盗られます。」

ヒロトもさつきとは、口調を改めて説明する。

「まあ、それは大変ですね。」

「ええ、ですのであなたもお気をつけ下さい。」

これでいいんでしょ、アルト？

なんとなくだが、事情がわかったのでとりあえずもう少し中心に近づいてみる。

いろいろと話している間に少し人がひいたらしく中心の人物を知ることができた。

侍女にほとんど体をあずけ、今にも崩れそうに立っている。

気のせいかな瞳がキラキラとひかっている。

何より、その人は今日のお茶会で一緒だったユラ様だった。

リオ様の、お説教

・ ・ ・ は？byメアリ（前書き）

リオはメアリの侍女です

・ ・ ・ 一応

リオ様の、お説教

．．は？byメアリ

とりあえず知っている顔だったので声をかける。
一応、礼儀だからね。

「ユラ様、お手をおかしましようか？

事の次第は聞いたのですが。」

「まあ、メアリ様。大丈夫、です。

どうも、ありがとう、ございます。」

途切れ途切れに言葉がかえってきた。

そして、その声は弱々しい。

間違っても”大丈夫”そうには見えない。

どうしよう？

ここで「それでは」とか言って去ったら、さすがにいけないよね。
絶対アルトに睨まれるし。

そのとき、手首をぐつとつかまれた。

「えっ？」

誰？

ヒロトとアルトではないことはたしか。
こんなつかみ方しないから。

「メアリ様あゝ？
お探ししましたよ。」

「り、リオ。」

リオからでてるオーラがハンパない。

「どちらにいらっしゃたんですか？
寮の手続きしてる間にどこかへ行っちゃって。」

うわぁ。始まった。

リオのお説教長いよね。

やっぱり今日も逃れられない？

「あら。ちゃんと言ったわ。

寮のお手伝いされている方？」

”用があるのでちょっと行ってきます、ってあそこの人に伝えてね。よろしく”って」

「それとこれでは話が違います。
ホント、どこに行っていたんですか？」

「え？ 別に城内を散策してただけよ？
侍女の服で。」

そして、ヒロトの部屋にもいたけど。

「そうですか。では、そういうことにしておきますが。
だいたいいつもあなたはそうでしょう。
どこへ行っても、いつのものにかいなくなってるじゃないですか。」

「そのなこたないわよ。」

家族で行ったときとか、ちゃんとみんなと一緒にいるわ」

「そのときだけでしょう。くどくど　くどくど・・・」

以下略」

「これからは気をつけます。はい、はい。絶対にしないから……」

そんなことをやっている間にユラ様たちはいなくなっていた。声をかけてこなかったのは、まだシヨックから立ち直ってなかったからなのか。

近寄りがたい雰囲気を感じてしまったのかは、分からないけど。

「メアリ、また怒られてるし。」

それで素行も改まればいいんだけどねえ」

「いや、あいつの場合絶対改まらねえだろ。」

さっきも俺の部屋にいたし。

「でも、リオもだんだんバーベナさんに似てきてないか？」

「バーベナさんって、メアリの世話役の人だったよね。」

まあメアリの傍にいればああなっちゃうのも分かる気がするよ。」

あの説教に巻き込まれるのは御免だというヒロトとアルトは、少

し離れたところでそんな会話をしていたのです。

リ才様の、お説教

・ ・ ・ は？b y メアリ（後書き）

なんかキャラが暴走し始めた気がする。
どうしよう？

小さな旅立ち

——翌日。

今日は、カーテンからもれる温かな光だけで目覚めることができた。

やっぱり心構えがちがうのかな？

しばらくして入ってきたリオも驚いていた。

てつきりまた、起こさなくてはいけないと思っていたらしい。別にわたしだってやればできるんだから。

朝食の席。

今日は、家族全員がそろった。

それに伴いほとんどの使用人も集まっている。

そこまで広くもない食堂は、だいぶ密集している。

そんな、みんなで送ってくれなくても・・・

「メアリ、絶対に変なことに首をはさまないのよ。」
これは母。

「そうですよ。」
自由になったからって、変なことしないでください。」
これはケイ。

「まあ、二人ともそのへんにしておけ。
メアリも忠告はしっかり守るんだぞ。
それから私との約束も心得ているはずだな？」

これは父。

そうだった。

お父様との約束もあつたんだ。

「はい、承知しております。

城での生活、充実したものにしますわ。」

「そうね、メアリ。

だけど、まずはあなたが楽しんでくるのよ？」

「ありがとう、お母様。

楽しませていただきます。

お母様も家でゆっくりしてくださいね。」

そして最後に。

「ああ、メアリ様。

大きくなられて。立派に育ちなさった。

これからはレディらしく振る舞うのですよ。」

瞳が少し潤んでいるような気がするのはいのちのせい？
でも……………ありがとう。

「はい。努めますわ、バーベナ。

ホントに今までありがとう。

娘さんの具合を何より心配しています。

どうかお元気で。」

つとめて明るくそういつて少し下をむく。

みられたくなかったから。

……わたしだって寂しいんだから。

いつも威勢のいいバーベナがそんなだったから余計にしんみり

した。

そんな会話をして、朝を過ぎたあと、わたしは城へ出発した。
ここでもほぼ屋敷中の人が見送ってくれた。
もちろんバーベナもいて「どうかお元気で。」と手を握ってくれた。

いったいわたしは嫁にでもいくのか・・・
そんなふうに思うような見送りだったけどうれしかった。

コトコト、ガタ、コトコト・・・・・・・・
馬車がゆったりと道を走る。

時々、揺れるのは石かなにかが道に落ちていたのだろう。

ここは、城下の表通り——食品から雑貨、チェーン店から個人経営店まであって、この国最大のにぎやかで活気のある通り——から一本裏に入った通りだった。

しかし、裏通りといっても王都。
貴族や商人など上流階級の者の屋敷が立ち並び、道も舗装されている。

主にこの道は交通手段としてつかわれているのだ。
グランテーヌの屋敷は少し先の港町にあったが、それでも王城へは馬車で半時もかからないくらい。

ホントにいつでも帰られる距離なのに。
だから、あんなふうに見送ってくれなくても・・・

まだまださっきのことを引きずっているメアリだった。

そしてバーベナのこともあったからよけいに。
今頃、もう列車にでもものっているのかな。

だが、さすがに王城が近くに見えてくると心が弾んだ。

舞踏会やお茶会などで頻繁に城には出入りしてるけど、やっぱり
心持が違つと変わつて見えるものね。

なんか、すごく新鮮。

服も身軽で楽だし。

（貴族の令嬢として行くわけではないので、使用人に近い簡素な
服を着用中。）

やがて城の門をくぐつて城内へ入る。

そしていつもは降りるロータリーでは止まらず、城の少し奥へ行
く。

使用人のつかう施設はほとんどが城のなかほどに位置する。

だからそこまで送つてもらふことにした。

ほんとうは歩いて行きたかったんだけど時間がね。

みんなとお別れをしてたら時間が無くなつてしまったのだ。

まあそんなこんなで城についた。

今日からはここで新しい生活が始まるんだ。

小さな旅立ち（後書き）

久しぶりです。

これからはもう少し頻繁になるかも。

どうでもいいけど馬車で半時ってどれくらい？

寮母さん

「ふあゝ。

よし、まだ7時。」

王城生活1日目。

とにかく寝坊はしなかったらしい。

まずここで一安心。

これから身支度をし、食堂へ行つて朝食を食べ、それから・・・頭のなかで今日のスケジュールを思い浮かべる。

これからはリオがいらないから自分で考えなきゃね。

昨日はあれから寮の部屋へ行き、自分の荷物を整理した。

一応事前に間取りは見ていたからそこまで戸惑うことはなかった。

わたしの部屋は全3階立ちの3階。

寮の侍女見習いであるソラによると、上のほうが身分の高い人の部屋になってるそう。

ほんとうは3階の内でも広い部屋を割り当ててくれていたみたいだけとお断りした。

それでも1人部屋としては広いくらいだと思う。

2階のほとんどは2人部屋なのに。

わたしがこんな部屋をもらってよかったのかな？

そんなことを思い出しながら階段を下りていく。

主に1階が公共のフロアで、食堂やちょっとした談話室があったりする。

まあそこで夜遅くにはしゃいだりすると寮母さんにものすごく怒られるらしいけど。

「おはようございます。」

食堂に入るとまず寮母さんにあいさつをする。

まだ朝早いためか人はまばらだ。

寮母さんはこの女子寮の管理をほとんどしている。

元は侍女長だったこともあるらしい。

今は引退して結婚もしているし子供もいる。

まだ朝早いためか人はまばらだ。

「あら、おはよう。」

よく起きられたわね。」

そのあとに「ここに来たばかりの子は時々寝坊したりして急いでくる子もいるからねえ」と呟いた。

そうなんだ。

わたしも他人事とは言えない。

明日からそんな風になりかねないのだから。どうしよう。

「そういう時はどうするんですか？」

もし遅刻しそうなときは参考にしようと思いついてみる。

そしてあいているカウンター席に座る。

「そうだね・・・」

サンドイッチとバナナを布にくるんで暇なとき食べるように言
って渡すかな。」

へえ、なんかいいなそういうの。
わたしも今度遅刻してみようか・・・
いけない。絶対現実になりそうだ。

「はい、どうぞ。今日の朝ごはん。
これで元気つけな。」

「あ、どうも。」

・・・(トーストとサラダを食べ。)
・・・うん、すごくおいしいです。」

「ごちそうさまでした。」

「はい。」

「今日も1日ががんばなさい。」

そんなあいさつをかわして寮を出る。

途中、植木の手入れをしているソラに会ったので「おはよう」と
あいさつしたら、なぜかものすごく動揺して「お、おはようござい
ます」言われた。

「なにか変なことしたっけ？」

次は王子に会うことだなあ。

どんな人なんだろう。

一応わたしも貴族だから王子を見たことがないといえば嘘になる。

舞踏会とかで見たことはあるはず。

でも、とりあえずわたしのモットーは”知恵をつかって楽しく生きる!!”。

というわけで興味のないものには、関わりたいとは思わない。

よって王子とも確か話したことがない。

うん、そういうことね・・・

てか、何も聞いてないし。

なにを教えればいいんだ？

うん。まあいいか。

会ってから聞けばいいや。

そして王子の部屋につき・・・

「失礼します。」

扉の前に立っている衛兵に身分証をみせなかに入った。

寮母さん（後書き）

何日ぶり？かの投稿です

この前、もう少し頻繁に出せるとか言っただよつなきがしたので
がね。

アハハハ・・・

つたない文ですが読んでいただいてありがとうございます

王子との対面

「失礼します。」

とりあえずそういつて部屋に入る。

部屋の中は、案外落ち着いた調度品ばかりであり王子にはふさわしくないのでは？と思うほどだった。

ほとんど王子の人柄を知らないのだから”意外”だとは言えないのだけれど。

まあ、世間一般の人が思う”王子”がいる部屋とはかけ離れているとでも言えればいいのかな？

奥へ進んでいくと机にむかって、黙々と書類に何か書いている人影が見えた。

多分あれが王子であるキース様なのだろう。

顔は見えないけど。

その横には、騎士？それとも王子の側近の方？らしき人がいる。

もしかしたら騎士兼側近の方なのかもしれない。

ひとまずヒロトじゃなかったことに安心。

ちょうどわたしが執務机の前あたりに来たところで王子は顔をあげた。

顔を見たことはあるのでとくに思うことはない。

そこらへんの人と比べれば顔は整っているとは思うけどそれ以上のことはわたしにはよくわからない。

お茶会やら舞踏会やらではみんながワアワア騒いだりしてるけど、わたしはそうなんだうとしか言いようがない。

要するにそこまで興味がわかないってことなただけ。

王子のほうはといえばことらを一瞬みたあと、おもむろにくちを開く。

そして出てきた言葉は

『・・・こんにちは？』

まあ何と言うか言いたいことがいっぱいある。
まず、その間は何だろう？

それにわたしに対してこんにちはでいいのか？
それから、なぜ疑問系なの？

そしてそして、最大の疑問はこれ。

何でわざわざ母国語であるポーリア語を使わず古代セオラ語で話すのでしょうか？

それも他にもこの辺の国で使われているカルミア語やオーバ語ではなく、一番面倒くさい古代語。

たしか日常会話ではほとんど使われていないはず。

・・・。。。

わたしを試すため？

教える方がバカじゃ意味ないから？

・・・。。。

うん、それ以外考えられない。

（自問自答だし。）

それならわたしもセオリ語で返すべきよね。

『こんにちは、王子殿下。』

メアリと申します。

どうぞ、これからよろしく願いします。』

言い切つて頭を下げる。

おお！いつもより、会釈しやすい！

やっぱ服は質素なのがいいなあ。

てか、そんなこと言ってる場合じゃない。

あの返事でよかったの？

『メアリどの、か。』

こちらこそよろしく頼む。』

どうやらよかったらしい。

ローズ様とは違って何か威厳さがあるような。

たしか王子はわたしより1つ下だった気がするんだけど。

「ところで、どこかで会ったことあるか？

何かみたことあるような気がするんだが。」

あ、言葉戻った。

こっちのほう聞き取りやすい。

あたりまえなんだけどね、母国語だし。

てか、質問に答えないと。

と、わたしが一人そんなことを思っているなか。

前方からコソコソと話し声が聞こえてきた。

「キース様。それ口説き文句ですか？

「古いですよ。」

「・・・別にそんなつもりはないが。」

王子の隣に立っていた人が王子にコソツと話しかけている。

勝手に寡黙な人などと思ってたけどそんなわけではないらしい。

というかむしろ真逆かもしれない。

王子に、にやけてつつこんでるし。

そして王子もほんとはこっちが素なんだろうな。

完全にすねてる。

返事がすぐくぶつきらばう。

半分くらいはあきれてそうなんだけど。

慣れてるのかな？

「ほら、王子。」

メアリさん？ が困ってますよ。」

「・・・うるさい。」

おまえが余計なこと言いだすからだろ。」

「申し訳ない、メアリどの。」

こちらで話しこんでしまつて。」

いえ、思いつきり聞こえてましたから。

とは言えず、礼儀正しく返しておく。

「こちらこそ、紹介不足で申し訳ありません。
わたしはメアリ・グランテーヌと申します。」

これで、おわかりになるでしょうか。」

王子にこの問いかけはまずかったかな。
でも言っちゃったし。

すると王子の方はなんと、今日はじめての笑みをこぼした。

「・・・かしこいな。あの古代語といい。
グランテーヌ家の令嬢だったのか。」

「いえ、それほどでも。
それよりわたしはこれからどうしたら良いのでしょうか？
何も聞いていなかったのです。」

そうよね。まずはこれを聞かないと始まらないわ。
ほめられるってのもうれしいことはうれしいんだけど。

王子との対面（後書き）

メアリは王子の前でも全然変わりません。
一国の王子に会えたというのに。

また中途半端なところで終わりました。
次もそのうち更新します．．．．．たぶん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3872u/>

猫かぶりの日常

2011年11月13日19時18分発行